

大聖堂のある街で

第4話

二人きりの喫茶店



堀田耕介

二人きりの喫茶店

次の木曜日は雨が降っていた。4時の待ち合わせだったけど、ぼくは3時半には本屋さんの前にいた。あんまり大きな本屋さんではないから、ずっと中で待ってるわけには行かないし、まわりの店をのぞいたりしてうろうろしていたんだけど、20分前になると我慢できなくなつて、書店に入って中の雑誌を読んだりしていた。店番のおじさんはいつもの人と違って立ち読みにうるさい人で、ときどきえへん

と咳払いする。どうしてだか今日は店の中にぼく
しかいなくて、どきどきするのとプレッシャーを感じ
るので10分前には店を一度出て、またあたり
をうろついた。傘の花が咲いている。石畳を雨が流
れていく。白い花の匂いがしてきた。市庁舎の隣は
植物園になっていて、ぼくはその周りを一周して本
屋さんの前に戻ってきて、市庁舎の時計を見たら
ちようど4時になっていた。扉を開けて、中から制
服の女の子が出てきた。ぼくを見て笑いかける。

「ユキちゃん。」

でもそれはカスミではなかった。

「えっちゃん。」

「どうしたの、また本を買いに来たの？」

「うん。」

ぼくはどきどきした。

「せっかくだからちよっとお茶しない？おごってあげるから。」

「う、うん。」

「だめ？」

「う、うん。」

「なによ、はつきりしないわね。」

えっちゃんは面白そうにぼくの周りをぐるぐる回る。

「そういえばユキちゃんのお父さん、今日まであの時計店で仕事だと言ってたわ。お父さんにおうってもらおうか。」

「ぼ、ぼく用事があるから。」

「あれ？誰かと待ち合わせしてるの？」

ぼくは真っ赤になった。

「何だ？さては女の子だな。」

「そ、そんなことないよ。」

えっちゃんは満面ににやりとした笑みを浮かべた。

「もう、子どもものくせに。もてていいわね。」

「そんなんじゃないよ。」

どうしよう、こんなところをカスミに見られたら。

ぼくが本当に困った顔をしているのを見て、えっちゃんは吹き出した。

「もう、わかったわよ。いじめない。また今度にしようね。じゃあねー！」

えっちゃんは手を振って市庁舎の方に行った。その方向から、同じ制服を着たカスミがやってきた。

「あ、カスミ！今帰るの？」

「うん、えっちゃん、さようなら。」

「ごきげんよう！」

二人で手を振って、二人で声を立てて笑った。傘の花がくるくると回った。

ぼくはぼーっとしてその光景を見ていた。何か全然知らない世界がそこにある気がした。カスミはグレーのジャンパー、スカートの制服に、白いブラウスを

着ていた。髪は後ろでまとめ、白い大きな髪留めをして、その上にライトグレーの帽子をかぶっていた。ぼくの方を見てにこっとして手を振った。

「ごめんね、遅くなって。」

ぼくたちは植物園の裏にある、小さな画材屋さんの二階の喫茶店に入った。少しぎしぎしする階段を上ると、店の中にはスタンダードナンバーが流れていて、壁には額に入った大きな客船の絵のポスターがかかっていた。大きな掛け時計があつて、静

かに振り子が揺れていた。外では雨の音がした。店の中には、マスターの他に誰もいなかった。

「ねえマスター、カシスソーダ。」

マスターはグラスを磨きながら微笑んで言った。

「いつもどうも。こちらは？」

「ユキちゃん、お友だちよ。」

「珍しい、男の子じゃない。」

「だってきれいでしょ、この子。」

マスターはぼくの顔をしげしげと見た。

「ほんとだね、こんなきれいな子、この街にいたん

だ。」

ぼくは顔が熱くなった。

「ぼくはきれいなんかじゃないです。」

二人は笑った。

「ユキちゃんは何を飲む？」

「何か甘くて、温かいの。」

「コーヒーは飲む？」

「ミルクを入れたら。」

「よし、じゃあミルクコーヒーにしよう。」

背後に緩やかに、スタンダードナンバーが流れる。

「いつもこんな店に来るんですか？」

「うん、お友達と一緒に。」

「えっちゃん、友だちななの？」

「あら、ユキちゃん、えっちゃん知ってるの？」

「うん、ぼくのお父さんの妹。」

「ええ！ そうなの。私たち、同じ学校なのよ。グレ

ードは違うけど。」

「同じ制服だもんね。じゃあぼくがカスミちゃんに会ってるの、えっちゃんにばれちゃうな。」

「恥ずかしい？」

「うん。なんか。」

マスターがカシスソーダとミルクコーヒーを運んできた。

「ありがとう。」

「どういたしまして。ごゆっくり。」

マスターがカウンターに戻る。

「いいじゃない、別に悪いことしてるんじゃないんだから。」

「そうかなあ。」

「まじめなのね。」

「そんなことないよ。いつもしんちゃんやりっちゃんと
いたずらして、司祭さんに怒られてばかりだし。」

「ふふ。」

カスミはテーブルに頬杖をついて、ぼくの顔を見て
笑った。

「仲直りしたの？」

「え？」

「このあいだ、海で言ってたじゃない、けんかしたつ
て。」

「ああ、そんなこと言ったわね。もういいの、あれ

は。」

「どうして？」

「ふふ、内緒。」

「どうして。」

「あなたが子どもだから。もう少し大人になったら教えてあげる。」

マスターが声をかける。

「カスミちゃん、なんかリクエストある？」

「そうね、こんな雨の日だから、ピアノより、トランペットがいいな。」

「トランペットか、うーん。」

マスターは少し考えて、レコードをターンテーブルに乗せた。ブルージーなピアノにあわせてトランペットの音がメランコリックに流れる。かと思ったら転調して、一気に青空を突きさすような明るい音になった。高らかに空に鳴り響いている。

「いい曲だね。」

「聞いたことある？」

「うん、ラジオでかかった気がする。」

「ユキちゃん、ラジオ持ってるの？」

「うん、ぼく自分で作るんだ。」

「すごいわね。」

「そんなことないよ、簡単だよ。カスミちゃんにも今度教えてあげるよ。」

カスミは苦笑いした顔をして言った。

「それはいいわ。私そういうの苦手だから。だからそんなの作れるなんて、すごいなと思って。」

トランペットが流れる。外は雨だけど、目をつぶってトランペットを聞いていると、すっきりした青空の下で金色のトランペットを、白いスーツに身を包ん

で白い帽子をかぶったトランペッターが吹いているのが見える。どこかのビルの屋上だ。朝日が昇ってきて、その演奏を、ぼくとカスミが地べたに座って、手をつないで聞いている……

ぼくはカスミといると夢を見てしまう。いや、今カスミといること自体が夢なのかもしれない。夢なら覚めないでほしい。

風が運んでくれたもの

次の週の木曜日の4時に、ぼくたちは植物園で会った。ぼくは待ちきれずに、3時に植物園に行った。平日の植物園の前は閑散としていて、日差しだけが降り注いでいた。ぼくは青い空を見上げて、さすがに早く来すぎたかな、と思った。

「こんにはは。」

どこからか声がする。ぼくがきよろきよろすると、「「「ちよ、「「「ち。」」

という声がうしろあたまの向こうから聞こえてきた。ぼくが振り向くと、リカが植物園の入り口のアーチの上に座っていた。

「こんにちは。」

リカは両手をメガホンのように口に当てて、ぼくに向かって、

「カスミちゃんに会えてよかったね。」
と言った。

「何で知ってるの？」

「私は何でも知ってるって行ったじゃない。」

「それにそんなところにいると危ないよ。」

リカはけたけた笑った。

「あたしのこと心配してくれるなんて、ユキちゃんだけだわ。嬉しい。」

リカは空中で二回転半してぼくの前に着地した。

「サーカスにでもいたの？」

「失礼しちゃうわね。月面宙返りよ。すっごく練習したんだから。」

「体操部なんだ。」

「部じゃないけどね。」

リカはおかしそうに言う。

「今日はどうしたの？」

「あなたがかすみちゃんとデートしに来るって分かったから、その前に私とデートしてもらおうと思って。」

「デート？君と？」

「だって、あなたきれいなんだもん。」

リカはてれたように身体をくねらせた。3歳児くらいのリカがそんな動作をすると妙にかわいい。

「何だい、リカもぼくをからかうの？」

「からかってなんかいないわよ。あなたはどんどんきれいになってるんだもん。恋をすると男の子ってきれいになるんだなって思っで。」

「なんか変な感じだな。女の子なら聞いたことあるけど。」

「そうなのよ。女の子は恋をするとききれいになるわよね普通。」

「いや、普通って言ってもぼくにはよく分からないけど。」

「でも男の人って、恋とかすると鼻の下が伸びたり、バカみたいに明るくなったりぼーっとした顔したりして、なんだかなーって感じじゃない。」

「なんか当たってるかも。」

「でもね、あなたは夢を見ている素敵ない感じがあるのに、バカみたいじゃないから、いいなって思ってる。」

「そんなこと自分では分からないよ。」

「そうね、それが問題なのよね。人は何かに夢中になるのはいいんだけど、夢中になると現実が見えなくなりやすいじゃない。でもあなたは、カスミちゃん

に夢中なのに、自分がカツコよくならなきや、カスミちゃんに追いつかなきやって一生懸命お洒落しているから、どんどんきれいになってるんだわ。」

「努力賞？」

「そんなやんごとない人みたいなこと言わないでよ。」

リカは声を立てて笑った。

「恋をしている人って、自分がその恋に値しているかどうかなんてなかなか考えないもの。自分の恋に一生懸命になっちゃってさ。恋ってふさわしくなく

たつて落ちちやつたらどうしようもないからね。でもユキちゃんはその恋と自分との間の距離が見えてるのよ。男の子はやっぱりそうでなくっちゃね。」

「ふうん」

「どうしたの？」

「いや、これって恋なのかな。よくわからなくて。」

「恋なのよ。」

「間違いなく？」

「うん、間違いなく。」

リカはぼくに顔を近づけて言った。それからぱつと

表情を変えてニコツとして言った。

「ねえ、風船買いにいこうよ。」

「風船？」

「市庁舎の前で売ってるから。」

「ぼくお金ないよ。」

「私が持つてるから大丈夫。でも私800歳越えても見かけが3歳児だから、あんまり金遣いが荒いと怪しまれちゃうからさ、お兄ちゃんのふりしてついてきてくれるだけでいいからさ。」

ぼくは市庁舎の時計を見た。まだ3時20分だ。

「まだ時間があるから、行ってもいいよ。」

「ありがとう！」

リカはぼくの腕をつかんで走り出した。こんな妹がいても悪くないかもな。ぼくはちよつとそんなふう
に思った。でもぼくにはお母さんがいないから、妹
ができるってことはない。

市庁舎前の広場はいつもいろいろな屋台や出店
が出ていて賑やかだ。似顔絵描きの隣にレモネード
売り。靴磨きの隣に帽子の修理屋。外国風の羊
の肉をあぶって売る店。いつもアイスクリームを売

ってるキリヤは今日はお母さんのお見舞いに行く
と言ってたからお休みだ。レモネード売りの子が手
持ちぶさたにしている。まだ4時前だからみんなま
だ準備時間という感じでのんびりしている。でもこ
んなお日様が長い時間だと言うのに、上機嫌で酔
っ払ってるおじさんとかもいて、市庁舎前はいつも
賑やかだ。その向こうにはロータリーがあつて車が
ぐるぐる回っていて、真ん中に音楽家の銅像が立
っている。音楽家は小さな女の子と犬を連れて走
っていて、音楽家の肩には鶏がとまっている。いやあ

れは鶏じゃなくて雉だという意見もあるし、伝説のナイチンゲールだという意見もある。あの女の子は本来猿だという意見もあって、だからこの銅像は本当は音楽家じゃなくて鬼を退治に行くところだという意見もある。犬と鶏と女の子連れてどうやって鬼退治に行くんだろう。その女の子はなんとなく、リカに似ている気がした。

風船売りは市庁舎の隣の商業会議所の列柱の前に店を出していて、色とりどりの、いろんな形をした風船を売っていた。音楽家の形をした風船も

あつたけど、膨らますと太っちよになっちやってちよ
つとかっこ悪い。リカはいろんな形をした色違いの
風船を7つ買った。三つをぼくに渡して、二つずつ
を手に持って走り出した。なんだか飛んでるように
見える。

「そんな走り方していると、ほんとに飛んでっちやう
よ。」

「大丈夫。飛ぶのは慣れてるから。」

そういうとリカはふわっと浮き上がって、ぼくの両
肩に腰掛けた。

「おわ。」

「大丈夫、重くないでしょ。ユキちゃんに肩車してもらいたかったんだけど、重いかわいそうだなと思って、風船買ってもらったの。」

リカの声が頭の上でした。

「ねえユキちゃん、このままどこかに飛んでっちゃんおうよ。」

「ぼくは飛べないよ。」

「大丈夫よ、ユキちゃんなら飛べるわ。ユキちゃんきれいだもん。」

「きれいな人が飛べるなら、今頃地上は天使だらけになってるよ。」

「ふふ。だれが気の利いたこといいなさいって言ったのよ。」

「だってそうじゃん。」

「ユキちゃんには見えてないだけで、この世は天使だらけなのよ。魔法使いも一杯いるけどね。」

「魔法使いは箒にまたがって空を飛ぶんじゃないの?」

「最近はずきブラシでも飛ぶみたいだけど。」

「リカは天使なの？魔法使いなの？」

「うふふ。内緒。」

「ちえ。リカの言うことって、あてにならないんだから。」

「大丈夫よ、あてにして。それに私、ユキちゃんのと好きになっちゃった。」

「ええ？」

「私じゃダメ？」

リカは悪戯っぽく笑う。どこまで本気なんだか。

「ダメだよ。ぼくカスミちゃんのこと好きなんだか

ら。」

「大丈夫よ。私865歳なんだから、お姉さんとしてあなたたちのこと温かく見守ってあげるから。」

「お姉さんじゃなくて超超おばあちゃんじゃない。」

「まあレディーに向かって失礼ね。レディーに年のこと言うなんて。」

「自分で言ったんじゃない。」

「自分で言ってもあなたの方は知らない振りするのがマナーってものよ。」

「そんなことわかんないよ。」

「子どもだからしょうがないわよね。」

ぼくたちは市庁舎の横の大きな庭のところまで来た。リカは急にぼくの首の回りでくるりとまわり、足をぼくの首に引っかけたまま、ぼくの正面に来て言った。

「じゃあそろそろ私行くわ。風船ちようだい。」

ぼくはリカに風船を渡すと、ぼくのほっぺたにちゅっとして、それからふわっと浮き上がった。

「どこに行くの?」

「ワタル君ところよ。野暮ね。」

「二股？」

「そんなんじゃないわよ。今日は付き合ってくれてありがとう。カスミちゃん、いい人だから大事にするのよ。ばいばーい。」

急に風が吹いて、リカはぱーっと舞い上がり、見る間にどこかに消えてしまった。ぼくの肩に、リカのおしりの重みが残った。

「変なヤツだなあ。」

ぼくはサスペンダーとズボンをなおし、帽子を被りなおしてシャツをはたいた。

「でも、リカってどこかで会った気がする。一体どこで会ったんだろう。」

記憶を探ってみると、何かとても懐かしい感じがした。でもそれがなんだかは分からなかった。

ぼくは市庁舎の時計を見た。市庁舎の時計は、もう工事が始まっていた。やぐらが組まれていて、向こう側の三面は幕が掛けられていて、正面だけ盤面が見えている。左の足場で針を持って動いている人が見えた。お父さんかな。ぼくは目を凝らし

たけど、はっきりは分からなかった。時計は3時55分を指していた。ぼくは大急ぎで植物園の前に戻った。

「私はね、好きなものは好きなんです。」

「私もそうですけど。」

「でも私はね、嫌いなものは嫌いなんです。」

「それも私と同じですね。」

「気があいますね。でも私は嫌いなことはしたくないんです。」

「私もそうですけど。」

「でもするでしょう。」

「そうですね。しなきゃいけないことは。」

「でもやりたくない。」

「しなきゃいけないならあきらめてそのことは考えないようにして、しますけど。」

「ううむ。いかん。それは身体に悪い。」

「でもしないほうが身体に悪いことだってありますよね。」

「ううむ。君は大人じやのう。でもわしは身体に悪

くてもしたくないことはしないんじや。」

「そうなんですか。」

「そうなんじやよ。お！もう4時か。それじやお嬢ちやん。また会おう。」

ぼくが植物園前に行くと、カスミがどこかのおじさんと話していた。おじさんは時計をみると、そそくさとどこかに行ってしまった。

「カスミちゃん！」

「あ、ユキちゃん。」

カスミはぼくの方を見て手を振った。青と白のス

トライプのワンピースを来て、白いカーディガンを羽織り、ブルーのポンプスを履いている。唇には、薄いピンクの口紅をさしていた。

「今の人、だれ？」

カスミは首を振った。

「知らない。いきなり話しかけられたの。」

「でもなんか知ってる人みたいに話してたよ。」

「そんなことないんだけどね。あの人がフレンドリーだったからなんとなく私もフレンドリーになったのかもね。」

「びつくりしちゃった。カスミちゃん、お父さんいないって言ってたのになあって思って。」

「ふふ。お父さんじゃないわ。でも不思議な人だったわね。」

「制服はどうしたの？」

ぼくはカスミのワンピースが素敵だなと思った。カスミは肩から掛けた大きなバッグをちよつとずり上げて言った。

「ちよつと時間があつたから、こないだの喫茶店の下の画材屋さんで着替えてきたの。そこのお姉さ

んと仲良しなのよ。」

「カスミちゃんてお友達たくさんいるんだね。」

「女の人ばかりだけどね。」

ぼくはなんとなく嬉しくなった。

「男の子の友達は何ぼくだけ？」

カスミは何も言わないで微笑んで、ぼくの手を握ってから

「うん」

と言った。心臓が急に早くなった。何か言わないと。

「制服も素敵だけど、ストライプも似合うね。」

「ありがとう。」

カスミはくすつと笑って言った。

「あなたもお洒落ね。白いシャツに濃いチャコールグレイのズボン、幅広のサスペンダーにハンチング。ずいぶん考えたでしょう。」

「髪の毛だって、一生懸命とかしてきたし、靴だって磨いてきた。」

「素敵よ。」

カスミはぼくの帽子をとって自分で被り、ぼくの

頭を撫でた。ぼくは嬉しくなつて鼻の下をこすつた。

「行きましょう。」

ぼくたちは門で入場券を買つて中に入った。入つてすぐのところは噴水になつていて、周りに背の低い草花が植えられていた。6月の植物園は花たちで一杯だった。色とりどりのアイリスが咲き乱れる一角を抜けると、むせ返るようなバラの匂い。中に花びらを摘んでいる人たちがいた。バラの花を集

めて、香水にするんだよ、とカスミは教えてくれた。

「カスミちゃん、香水好き？」

「ふふ。好きよ。でも私、まだそんな複雑な香りは似合わないし、第一高い香水は買えないから。いつもちよつとだけ、自分の好きな匂いを付けてるの。」

「ふうん。カスミちゃん自身の匂いかと思ってた。」

「ふふ。だれでも少しは自分の匂いを持ってるから、それにあわせて一番いい匂いを少しだけ付けるのよ。」

「ぼくカスミちゃんの匂い、好きだよ。あの時、赤い

コートにぶつかって、その匂いが残ってて。ぼくの服にも、そのあと買った本にもだよ。うちに帰ったらカスミちゃんの匂いがふわっと漂ってきて、カスミちゃんのこと思い出して、会いたくて仕方なくなつて。」

「嬉しい。まだまだ香水の付け方、下手だなあって思ってたし、いずみちゃんにもそういわれたんだけど、付けててよかった。おかげでユキちゃんに会えたのなら。」

「いずみちゃんって?」

「あの時一緒にいた…」

「白いコートの人？」

「そう。」

「あの人もきれいだったね。」

「そうね。」

カスミはちよつと目をあげて前を見た。あ、なんかいけないこと言ったな、という気がした。

ぼくはカスミの手を握った。カスミはぼくを見て微笑んだ。

「嬉しい。」

ぼくたちはバラ園を抜けて、野草が生えている一角を歩いた。まるで自然に生えているかのような草原や野山の草花が、ぼくたちの足の下に広がっていた。マーガレットが咲いて、矢車草が咲いていた。

ぼくたちはいろいろな話をした。カスミはいろいろなことを知っていて、ぼくに教えてくれた。ぼくはラジオの話とか、外国の放送を聞いた話とか、そんな

ことしか話せなかつたけど、カスミはうまくぼくの話を引き出して、面白がって聞いてくれた。ぼくたちは最初、お姉さんと弟みたいに話してただけど、そのうちあんまり年の差とかが分からなくなってきた。変だなと思う。カスミのほうがずっと上なのにな。

ぼくたちは薄紫の百合が揺れている山道みたいな丘の上を、手をつないで歩いた。空は真っ青に晴れていた。しばらく行くとヒースのはえている草原

みたいな場所に出た。

「私、ここが一番好きなの。」

カスミは手を離して走って行って、夕陽の見える斜面に腰を下ろした。

「おいでよ。」

ぼくは歩いて行って、カスミの隣に座った。

「ねえ、横にならない。」

「いいよ」

カスミは横になってうーんと伸びをした。

「ユキちゃんも横になりなよ。」

「ううん。カスミちゃんの顔がよく見えるから、座ってる。」

カスミはちよつと赤くなって、起き上がった。

「もう。照れちゃうでしょ。」

「なんだ。寝ててよ。」

「ばか。」

カスミはそう言って、ぼくのほつぺたを撫でた。ぼくはカスミの瞳を見た。カスミもぼくの瞳を見た。

「お嬢さん、愛とはどういうものだと思うかね。」

「私、分かりません。」

「愛とは、いとおしく思うことじゃ。」

「すみません、私急いでますから。」

急に声がして驚いて振り向くと、さっきのおじさんが誰かに話しかけていた。その誰かはおじさんを避けるように向こうに歩いていこうとしている。

「えっちゃん！」

ぼくは驚いて声に出したのだけど、えっちゃんは気がつかないみたいだった。おじさんは盛んに話しかけ

ながら、えっちゃんに行く方向に歩いて行った。

「えっちゃんもここに来てたんだ。見られちゃったかな。」

ぼくはちよつと心配になった。カスミちゃんといるところを見られてたら、またえっちゃんにからかわれてしまうかもしれない。

「えっちゃん。」

カスミは立ち上がった。でもえっちゃんとおじさんは、合歓の木の角を曲がると、見えなくなってしまった。

「大丈夫かな。」

「大丈夫だと思っわ。不思議な人だけど、変なこ
としそうな人じゃないから。」

「でもなんかえっちゃん、いつもと違う顔してた。何
かあったのかな。」

「多分それはあの人のせいじゃないと思っわ。」

「じゃあ、どうして？」

カスミはちよつと複雑な微笑みを見せた。

「私にも分からない。」

大聖堂のある街で 第4話 二人きりの喫茶店

<http://p.booklog.jp/book/44738>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44738>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44738>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.